

戒名と鎮魂（一）

—日本人は戒名に何を望んだか？—

保坂 俊司

目次

はじめに

一 なぜ戒名と靖国か？

二 「戒名」という不思議

三 死体を恐れた日本人

四 生死の峻別と死への恐れ

五 世界観と生死

キーワード：鎮魂、精神伝統、靖国、葬送儀礼

はじめに

小泉首相による靖国神社参拝を通じて、議論を巻き起こしつつある靖国神社の存在であるが、この靖国神

社に関する現在の議論には、大切な部分が欠落しているように筆者には、思われる。

首相などの政府の要人が、靖国神社に参拝するといわゆる「靖国問題」が引き起こされる。つまり、中国や韓国からの強烈な反発があり、これに対して日本側から反発が起こり、政治問題化・外交問題化するというわけである。しかし、思い出したように話題となるこの問題も、やがて議論されなくなり鎮静化するというのが従来のパターンであったように思われる。

しかし、筆者はこのようないわば政治的で、近視眼的な靖国神社問題の取り上げばかりに終始することは、政治や外交のレベルでは十分であるかしかないが、こと文化レベルにおいては、不十分と考える。つまり、靖国神社問題というのは、有史以来に限っても一千数百年の歴史を持つ日本の精神史、文化史、宗教史という脈絡で、議論されるべき部分が小さくなく、現今の議論には特にこの視点からの議論が不十分のように、筆者には感じられる。少くともここで靖国神社という宗教施設の社会的役割、また精神的・文化的、そして宗教的な役割を日本宗教文化史全体を通じて理解することは、政治問題化、外交問題化した靖国神社問題の解決に、決して必要では無い、と筆者は考えている。

というのも、靖国神社などに代表される近代的神道（いわゆる国家神道あるいは国体神道）においてなされるいわゆる国家主体の鎮魂という考え方、あるいはその儀礼が、日本の精神史上どのような意味を持っているのかについて、筆者なりの視点を持つからである。

ところが現在議論されている靖国問題は、いわゆる「A級戦犯」の合祀ということなどに集中し、個々人の鎮魂の歴史、あるいは国家や権力による鎮魂、特に国家などが鎮魂儀礼やその施設を「主宰する」というその発想の意味や歴史について、余り論じられることは無い。

また、その形態についても靖国神社において祭る（この祭るとい言葉もあいまいである。詳しくは後に検討予定）ということの日本精神史全体から位置づけ、ということも余り積極的になされていないように思われる。

筆者の視点を簡単に示せば、そもそも靖国神社は、戦死者（その定義は、後々検討する）を慰霊するという立場から、建立された「招魂社」をその起源とするが、現在の議論には、神社で死者の霊を慰める、鎮める、あるいは慰撫する、祭るといような儀礼伝統が形成されるまでの過程が、ほとんど考慮されない、つまり日本の鎮魂の歴史が、靖国神社問題では殆ど議論されることが無い、という点に大きな問題である、となる。

つまり、靖国神社形式による「鎮魂」という文化がどのように形成され、また国民に共有されるまでになったかの日本人の鎮魂の歴史が、現在の靖国議論には殆ど聴かれることがなく、その意味で現在の靖国神社問題が、政治問題としてのみ扱われる理由もここにあるのではないだろうか。しかも、その政治問題にしても「A級（筆者はこのA級という符丁的な呼称もよくないと考えている）戦犯の合祀」というような特殊な問題のみ議論されてしまい、本来議論されるべきである靖国神社において祭る、つまり鎮魂するということの日本精神史上、あるいは文化史的意味あるいは意義については、殆ど論じられることがない、少なくともその議論が乏しいように思われる、という点は日本人として、靖国神社問題を論じる際には、はなはだ不都合といわざるを得ないのではないだろうか？ つまり、日本人自身も靖国神社というものの文化史的、精神史、宗教史の意味を理解していない、ということになるのでは無いだろうか。

もちろん、筆者は政治学者でも、日本近代思想史の専門家でもないので、現在繰り広げられている靖国問

題の政治的な議論に参加する能力はない、しかしそれらの議論に宗教学者として、多少の貢献をしたいと考えている。

いずれにしても、現在問題となっていることの基本的な部分である「靖国神社による戦死者の鎮魂」という儀礼そのものの意味を日本人自身が、自らの文化史の上からきちんと理解し、他者に説明しないのか、できないのかは判然としないがこの曖昧さが、靖国問題を複雑化させる一つの大きな要因になっていると、筆者は考えている。

そこで、以下において数回に亘り、日本人の鎮魂儀礼の歴史について、宗教・思想・文化を考慮しつつ、この問題について筆者の考えを述べてみたい。勿論、このような大きな問題は、一人で取り組むことのできるようなものではないので、本研究では死者の霊の鎮魂という視点からこの問題を、仏教の戒名との関連を中心に考えてゆきたい。

このように云々と、靖国問題と戒名がどのように関係するのか、疑問に思う人もいるであろう。しかし、戒名などの仏教式の葬送儀礼による鎮魂の思想と、靖国神社に託された鎮魂は、決して無関係ではなく、むしろ両者の関係を明らかにすることに、日本人が靖国神社に託してきた思いを明らかにすることが出来る、と筆者は考えている。

以上の理由から本小論では、まず、日本の葬送儀礼、特に鎮魂の思想を概観し、次に仏教の果たした鎮魂の役割を、戒名の起源やその役割などを明らかにしつつ考察し、戒名に託された民衆の心を明らかにする。

さらに、近代以降推進された廃仏毀釈政策との関連から、仏教的鎮魂から靖国に連なる神道的な鎮魂へと移行する過程を概観し、靖国神社に象徴される近代神道がどのように形成され、また民衆信仰レベルでどの

ように受け入れて云ったかを、鎮魂という立場から考察する。

一 なぜ戒名と靖国か？

現在人の常識では、この組み合わせはちぐはぐな印象を受けるであろう。しかし、実はこの組み合わせの検討は、実に日本人の民衆レベルの鎮魂、つまり死者の鎮魂儀礼という視点からみると強い連続性を認めることが出来る。その理由は後述するが、両者の連続性や非連続性が分からなくなってしまっている、あるいは考慮されることが無い、という点にこそ、現在日本人の日本の宗教伝統軽視、あるいはそれへの無知・無関心の表れ、ということも出来るのである。そして、そこにこの靖国神社の問題が、政治的・外交的問題にまで発展してしまう日本側の不備がある。

というのも、現在議論されている靖国問題の視点は、高度に国家レベル、政治レベルの視点であり、また近代以降という日本の歴史から見れば、非常に短いスパンから、これを論じており、そもそも靖国神社が担っている鎮魂という視点に対して、十分議論や説明が尽くされていない点に問題がある、と筆者考えている。

勿論、政治問題化した靖国神社の議論にそのような議論は、不要という意見もあろうが、そもそも靖国神社に代表される日本人の死者の葬送儀礼、さらには鎮魂儀礼の延長に靖国神社もまた現在問題となっている「A級戦犯合祀」もあるものであり、これを単なる利害損得レベルの政治問題としてだけ論ずるのは、はなはだ不都合である、というのが、筆者のスタンスである。

つまり、たとえ政治問題化しても、靖国神社の問題は日本人の宗教心という視点から議論を行う必要があり、その議論は政治問題以上に十分議論すべき問題、と筆者は考えている。

それ故に、靖国神社の宗教的な役割は、鎮魂をキーワードに、国家や政治レベルのみならず宗教レベル、民衆信仰のレベルから、鎮魂儀礼の装置（施設のみならず、その儀礼やその役割などを含む言葉として使用）として、総合的に議論されるべきものである、と筆者は考える。

特に、靖国神社に象徴される近代神道における鎮魂の思想あるいは儀礼と、有史以来の日本人の鎮魂の思想との関連性が、殆ど議論されることがない点は、この議論が深まらない大きな理由となっているように筆者には思われる。

そこで、この問題を「鎮魂」をキーワードに考えるというのが本小論の意図である。そして、そのキーワードを象徴する存在が、戒名であり靖国神社である。

二 「戒名」という不思議

日本人は、自身の文化にたいして自覚や認識さらには誇りを持つという意識が希薄な民族かもしれない。特に、葬送儀礼ともなるとその起源や意味、役割あるいは効用というようなことを全く考えることなく、それに従い、それを行っているということが非常に多い。その典型がまず仏教式葬儀であり、その象徴的存在である戒名の存在である。

仏教民俗学を提唱し、日本の仏教研究において、現実的には最も重要な役割を果たしてきたにもかかわら

ず、殆ど体系的な研究がなされてこなかった仏教の鎮魂儀礼、つまり仏教的葬送儀礼に関して、その研究の必要性を早くから提唱し、また自ら精力的に研究を推進された葬送儀礼研究の大家五来氏によれば、日本仏教に独特な「戒名」は、仏教という衣をまとった「日本人の宗教」であり、「民間宗教」となる。後に検討するように、戒名の本来の姿は、我々日本人が考えているようなものではない。⁽¹⁾

しかし、だとすれば我々が「戒名」と呼ぶものは、一体何なのか？ それに明快に答えてくれる情報は、所謂伝統的な仏教からも、また宗教学の諸研究からも明確な答えははられにくい。その欠を補う存在として、先に紹介した「仏教民族学」あるいは「葬送民族学」を専門に研究した五来重氏の研究が、その謎に明快に答えてくれるが、それでもまだまだ明らかにされていない点も少なくない。

というのも従来の日本仏教研究、あるいは神道の研究は、教義的な研究が主で、民衆レベルの信仰や習俗に対しては殆ど無関心であった。とくに民間の間に「習慣」「伝統」、あるいは「仕来り」という表現で、漠然としていてとらえどころが無いにも拘らず、決してそこからは大きくはずれる事を許さない独特の風習や伝統が、厳然とあることは、誰でも経験していよう。

しかし、その起源や、なぜそれに従わなければならないか、というような問いに対しては、昔からの「仕来り」あるいは「文化」だからとしか言いようの無い事柄が沢山存在する。特に、死や葬送に関わるものにもそのような不可解なことが多い。

ところが、この葬送儀礼は「民間伝承」・「民間信仰」、さらに言えば「民間宗教」のレベルということで、「呪術的・迷信的・俗信」であり「前論理的な必要悪」程度のもので、済まされてきた。

ところが、このような民間レベルの俗信・迷信と呼ばれ貶められている民間信仰こそが、平均的な日本人

の宗教領域を動かしているのである。そして、この民間宗教とも言うべき領域に、従来の研究者は殆ど足を踏み込まなかった。少なくとも、その研究業績は、その重要さと比較して余りにも貧弱であった。

この点を反省し、民衆の文化レベルにアカデミックな視点を盛り込み、積極的に研究を行ったのが民俗学の柳田國男であり、折口信夫であった。しかし、彼らは仏教の日本文化への影響を極力排除しようとする傾向がある人々、特に柳田の仏教嫌いは有名で、彼に掛かると日本文化の殆ど全てが、仏教と無関係となってしまうのである。

このような民俗学のあり方が、日本文化の姿をゆがめるものであることは明らかであるが、その一方で、一般の仏教学者のように何でもインド・中国起源にしようとする、今度は日本に独自の文化が存在しないことになってしまふ。これもまたおかしなことである。本当は、その中間的な立場が必要となる。それを五来氏は「仏教民俗学」と呼んだ。

本小論はこの仏教民俗学の手法を用いて、いわゆる仏教式の鎮魂思想、鎮魂儀礼を、戒名を中心に検討し、後に同様な視点から近代以降、つまり明治以降の鎮魂思想やその精神的・文化的意味を靖国神社をキーワードに検討することとした。

三 死体を恐れた日本人

戒名の議論に入る前に、日本人の鎮魂について、簡単に紹介したい。日本の葬送儀礼の原型は、縄文時代にさかのぼることができる。さまざまな遺跡の発掘調査などから、埋葬にはいろいろなタイプや形態がある

が、残念ながらその思想や儀礼についてはよくわからない。しかし、発掘調査などから一度埋葬した土杭墓から掘り起こし、村の中心地に合葬して祈りの対象とするなどしている村もあることから、何らかの靈魂観があったことが知られる。

日本古代史が専門の岡村道雄氏は、千葉市権現原貝塚の生活を復元し、以下のようなストーリーがあったと推定し、そこから当時の鎮魂儀礼の意味について以下のように論じている。岡村氏に拠ればこの権現遺跡は、中期末から後期にかけての百数十年維持された遺跡だといふ。⁽²⁾

その葬送に関する部分によると、この遺跡は、出自のことなる二つの小グループが合わさって出来た小さな村落であった。この村の構成員は十六人で始まったが、中々人口は増えなかったといふ。中には幼くして亡くなった子どもの再生を願う「埋め喪」が幾つか発見されている。

この「埋め喪」というのは、子どもの再生を願って、家中、特に母親が坐る囲炉裏の座の下や家の入り口の通路の下に穴を掘り、喪などに入れて埋葬することである。それは、幼くして亡くなった子供が、再び母の胎内に宿るようにとの願いをこめた一種の呪術であった。そしてこの風習は、出産が自宅などでおこなわれていたつい最近まで、お産後の胞衣などを家の敷居や床下に埋めた風習として継承されているようである。⁽³⁾

しかしこの村は、中々大きくならなかったようで、途中で「祖先の霊を集落の広場に合祀して集落の絆を深め、祖先に守られて新たな気持ちでこの難局を乗り切ろうと」、祖先の墓を新たに村の中央に合祀した。

その合祀の仕方は「直径十五センチほどの柱を立て、杭のそこに黄色い粘土を半分過ぎの深さまで埋めた。そして穴の周りに四つ又に立てた細い柱を結び、尖って円錐形になった柱の上部には、簡単な屋根を葺

いた。一人分ずつ分けて運んできておいた骨を、柱の間から穴の中に、まず太い手足の骨から時計回りの方向にかさね井桁上に組み上げ、その後それぞれの隅に頭蓋骨を置いた。こうした所作を四回繰り返して、骨を積み上げる儀式を「おこなった。この時、村人全員が将来の繁栄をいのちたのであった。以後、この「開祖の合祀廟」は、長い間集落の人たちに祀られ、集落の中心的な役割を果たしたのであった。

ところで、何故この集落が祖先を合祀しようと思いついたかというところ、それは村に不幸が続いたからである。そしてその理由として元のリーダーの魂が、現世をさ迷っていて、それが禍をしているからだと考えたらしいのである。この村の苦境を脱するためには、早くさ迷える元リーダーの魂をあつめて送ってやらねばならない。そう考えた岡村氏は推測している。

そして、現にまだ死んで一年ほどしか経っていない、つまり白骨化していない元のリーダーの骨だけは、頭蓋骨や主だった手足の骨が、火にくべて焼かれ、この世をさ迷い悪霊となった元リーダーの魂を速やかに、死の世界に送ろうとした、ということである。

この時、悪霊となったと考えられた元リーダーの骨は、ばらばらにして埋葬され、魂を封じ込め、再生できないようにした。

この記述は、岡村氏が豊富な調査経験を基に再現した一種のドラマである。それ故に何処まで事実を表しているのか、逆にいえば後代の風習が氏の遺跡解釈に紛れ込んでいるかもしれない。⁽⁴⁾

しかし、この再現ドラマは、現在の法医学などを駆使しての再現ドラマであるので、信憑性は高いはずである。そうすると、我々は今から四千年ほど前には、すでに後に荒御魂（悪霊）信仰があり、またそれを封じ込めようと様々な儀礼が存在したことが分かる。

というのも同時代の遺跡からは、屈葬と呼ばれる埋葬墓が日本各地で発見されている。その解釈は色々だが恐らく、死者の魂が遊離しないように、この世に出てきて災いを振りまかないように、体内に封じ込めるために手足を折り曲げたり、時には骨折させてまで折り曲げたのである。さらにご丁寧に腹の上辺りに鎮め石まで置いた例もある。

ただし残念ながら、細かい儀礼などは殆ど分らない。そして、この後大陸文化を持ち込んだ弥生時代が続き、日本の靈魂観は徐々に形成されることになる。

ただ残念ながらこの時代の靈魂観などを文献は十分ではない。最古の葬送に関するものは『魏志倭人伝』である。それによると「其の死には棺あるも槨なく、土を封じて冢を作る。はじめ死するや停喪十余日、とぎにあたりて、肉を食らわず、喪主哭泣し、他人ついて歌舞飲食す。すでに葬れば家を挙げて水中に詣りて沐浴し、もって練氷の如くす」という光景である。

これによると喪主や遺族は死者を悼み嘆き悲しむ。まさに慟哭する。そこは死の穢れが充満する空間であり、遺族などの関係者の慟哭などによって「死者の魂」が鎮められると看做されていたようである。そのために遺族は、泣き続けなければならなかったのである。一方周りのものは対照的に、飲み食い踊る。

この二つの一見異り矛盾する行為の背後にあるものは、死の穢れを前提とした日本的な「穢れ（ケガレ）気枯レ」の思想に他ならない。つまり、死の穢れに染まっている遺族は、その穢れを自らの周辺に引き止めておくためになき悲しむ、一方その死の穢れが他に伝播しないように、あるいは外の空間に出てこないように、つまり「ハレ」生」の空間への防壁、境界を作るために、活力ある空間をそこに形成するために、飲み食い踊る。つまり、死の穢れ、あるいは死者の荒御魂が、生の世界に侵入しないように、這い出し

てこないように、互いの魂を大騒ぎすることで、防御しようとするのである。これが昨今でも行われる神道のナオライや仏教の齋(トキ)に繋がっている、と筆者は考えている。

もちろん、そこには死者の魂を勇氣付けるあめの宴であったかもしれない。『古事記』の天照大御神の岩戸隠れにおいては、天宇受賣命が酒を飲み酔っ払って胸をはだけ、局部を晒して踊ったところ、高天の原の一同が大笑いし、大騒ぎをしたということが書かれている。それなどは、まさに後代の魂鎮めと魂振り、ハレと穢れの再生儀礼の象徴であったであろう。その起源は先に見たように縄文時代に遡る。

もつとも、アニミズム的な再生儀礼によって、死者の靈魂が死体から遊離しないように閉じ込めようとした縄文人であるが、彼らは死者全てを忌避していたようでもなかった。だからその墓も特別のことが無ければ、生活空間の近くに作られることが多かったであろう。

ところが、大陸の稲作文化が持ち込まれた弥生時代、それは支石墓と呼ばれる石を用いた墓が出現する時代、つまり紀元前後のことである。この時代には中国や朝鮮半島では、すでに大規模な墓が築かれて久しく、日本でもそれを真似た世界観が定着したのであろう。

四 生死の峻別と死への恐れ

稲作を通じて定着した人々は、墓を作る余裕や祖先崇拜というような土地との連続性、死者への哀悼の念が形をとって現れてきた。そして、このころから死者と生者は厳然と区別される世になったとされる。

つまり稲作を主として定住した人々は、縄文のときのように自由に移動できないことから、死を視界から

隔離するために、自ら他所に移動するということができなくなったのである。そこで、村から離れた丘陵地ややや高い丘や台地に墓を作り、死者をまとめて葬った。いわゆる、死者の世界の発生である。そして、死の世界は聖の世界の対極に、つまり逆の世界のごとく意識されることになる。またその使者の世界は、専用の空間に囲い込まれることとなった。方形周溝墓と呼ばれる専用の墓場である。これは三内丸山遺跡に見られるように死者を村の中心地や隣接地に葬った縄文とは明らかに異なる世界観によっている、とされる。つまり、生きるものと死者の空間を峻別する思想である。

というのも弥生時代には、稲作を通じて大きな村が出現し、小さな国家とも言える集団も生まれた。それ故に、墓も墳丘と呼べるような大掛かりなものが生まれ、縄文時代と比べて人口もはるかに増加した。つまり、人間が豊かになりある意味で生を謳歌できる環境が生まれたのであろう。そうなると、縄文時代のように死を常に意識しなければならぬ生活から、生を楽しむ余裕が生まれたのかもしれない。そうすれば、死から離れたと思うのは当然のことである。そこから生と死を峻別する世界観が強調されたのではないだろうか？

つまり、死の世界が生の世界に対抗する形で確立された、ということである。その起源が、日本にあるのはまちがいないが、あるいは朝鮮や中国の先進文明の影響によって形成された部分も少なくなかったかもしれない。

五 世界観と生死

以上のように、古代人の死に関する思想の変化を簡単に見てきたが、次にその世界観について考えてみよう。

古代の埋葬法を髣髴とさせる文献となると、『日本書紀』『古事記』（『古事記』は本来私家版の史書であり、『書紀』の方が上位となる）の存在がある。特に、有名なイザナギとイザナミの神話が興味深い。この神話はあまりに有名であるが、よく読んでみるとなかなか興味深い内容である。つまり、イザナミは次々に子供を生むが、最後に火の神を生み局部を焼かれ、それがもとでついに死ん（神遊）でしまう。怒ったイザナギは、末の子供である迦具土の神を切り殺してしまう。

さて、この神は出雲の国と伯伎の国の境の比婆という山に葬られる。いわゆる黄泉の国である。「黄泉の国」というのは中国の地下世界であるが、日本でもそれに倣って死後の世界をこのように言ったのである。その死後の世界は、まさに腐乱死体の世界として描かれている。『古事記』では、イザナギが恋慕の余りイザナミのすむ黄泉の国へ行き、約束を破り妻の変わり果てた姿に、驚愕するということが書かれている。つまり、仲睦まじかった妻の腐乱死体を見た夫であるイザナギは、あまりの恐ろしさに逃げ出してしまった。そしてこの夫の裏切りに怒る妻、そして決定的な別れが描かれている。

よく考えてみると、この物語は死にまつわる一連の人間感情を表している。つまり、一度幽明境を異にすることになれば、どんなにいとましい妻や夫、あるいは子供であってもそこには、忌まわしい腐乱死体があるだけ、という厳しい現実である。この点を重視したのが日本人で、親の恩を嫌悪感に優先させたのが中国

の儒者と儒葬である。

この記述からは、恐らく死体を穴倉のようなところに葬ったという葬法が髣髴される。それは天照大神の箇所でも同様である。ところで、死者の肉体の損壊への嫌悪というのは、別段日本人に特別なものではない。しかし、日本人ほど可視的な、あるいは肉体が減んでゆくその過程を恐怖し、死を穢れとして忌み嫌う民族も少ないのではないだろうか？

確かに、肉親の死に關していえば、現前に広がる死体という現実と過去の記憶のハザマで揺れ動く感情、そして死という絶対的な現実恐怖する遺族の感情は理解できる。特に、遺体が徐々に腐敗し、白骨化するまでの間は、感情的には耐え難いものがある。

しかし、だからといってそれを穢れとして日本人ほど忌避する民族は多く無いであろう。特に、異常死に対する日本人の恐怖心は尋常ではなかった。いずれにしても日本の古代信仰には、死を乗り越える発想や手段は示されていない。ただ死から逃げ出すだけである。

つまり死体をなるべく速く追いやる、少なくとも自らの視界から隠すという消極的対応により、死の穢れ、恐怖から逃れようとするのが死者への対応であった。ここでは、腐乱した妻の姿に恐怖するというイザナギの姿に、当時の人々の死への恐怖が語られる。

しかし、これでは死の恐怖を解消する人間の知的な営み、世界観、精神力とも言うべきものがない。あるのは死者であるイザナミのすさまじいまでの怨念、後代荒御霊と呼ばれる死者の怨念を鎮める立てが示されていない。

『古事記』では、辛うじて死の恐怖、これを死の「穢れ」と呼ぶが、この穢れの克服は消極的とも思える

清水などでの禊と呼ばれる儀式である。それは宗教学などでいう類感呪術であり、水で汚れを落すように、実体化された死を水で流すという反射的な行為である。それを支配しているのは自分の身から離れればよいという考えである。

だから、死の穢れから古代の日本人はなかなか救われなかったはずである。古代人はいとおしい人の記憶と死という現実の間で、悩み苦しむ、怯え続けたのではないだろうか？

筆者は、この部分を読むと、その日本人の基層部分を表しているのではないかと、と思える昔話を思い出す。それは四国の民話であったと思われるが、次のような話である。ある山里に老夫婦が住んでいた。彼らは子がなかったので二人でいつまでも仲良く暮らしてゆこうと考えていた。ところがある日おばあさんが、突然亡くなってしまふ。最愛の妻、人生の伴侶を突然失ったおじいさんは、おばあさんを遠くに葬ることを忍びなく思い、庭先に埋葬した。死んでもいつまでも一緒にいられるようにと。ところがしばらくすると、毎晩毎晩おばあさんが庭先の墓から蘇り、玄関の戸を破れんばかりに叩き、「おじいさんはどこじゃー」と叫ぶのである。その姿はまさに天津しこめ、あのイザナミの姿よろしく腐乱死体である。

おじいさんは恐怖のあまり言葉もなく、長い夜を過ごす。しかし、朝になるとおばあさんは、お墓に戻りおじいさんは対応に苦慮する。しかし、なすすべなく、再び恐怖の夜を迎える。愛しいお爺さんを求めて戸をたたく腐乱死体となったおばあさん、おじいさんはついに耐え切れずに家を飛び出してしまふ。

必死の思いで逃げるおじいさんに気づいて亡者となったおばあさんが追いかけてくる。必死の思いで村はずれまでくるとおじいさんは精根尽きてしまふ。そこには一本の大きな杉の木が生えており、おじいさんはそこにより登り、おばあさんをやり過ごそうとする。

しかし、樹上のおじいさんに気づいたおばあさんは、ついに杉の木により登ってくる。絶体絶命のおじいさんは、恐怖のあまり震えるのみである。しかし、そのとき咄嗟に昔旅の僧に一夜の宿を貸した折、教えてもらったお念仏が、口をついてでた。「南無阿弥陀仏」と。

するとその瞬間、おばあさんの醜い顔は、まるで仏様のように変わり「おじいさんありがとう」というと、灰となって散ってしまった。

おじいさんはお念仏の功德に心から感謝して、おばあさんをねんごろに供養して一生を過ごした。というようなストーリーである。

仏教的にかなり潤色しているが、ここに日本人が仏教を受け入れた事情があるように思えてならない。それは日本人が如何に死の恐怖を簡単に超越できなかったか、ということである。

だから、古代の律令の中には、死体を道端や軒下に捨ててはならない、埋めてはならないというような妙な（？）法令が出されたのである。そして、このような死を恐れる思いは、特に非業の死を遂げた人々への恐怖へと収斂していったようである。

岡村氏の研究でも紹介したように、特に不幸を引き起こす死者の霊の存在は、長く日本人の恐怖と鎮魂の対象であった。

実に、明確な神の概念や世界創造の思想を発達させなかった古代の日本人は、日常における非常な現象の起源を、心理的な嫌悪感と結びつけて、死者の霊魂、それも非業な死を遂げたものの霊魂に求めた。

ここに後に祟り信仰・御霊（荒御霊）信仰と呼ばれる日本独自の霊魂観、そしてその鎮魂の思想の起源がある、と筆者は考えている。

そして、日本人はこの死者の供養（鎮魂）のために、仏教を受け入れたと考えている。少なくとも、仏教が民衆レベルにおいて受け入れられて、それが定着するためには、この仏教による鎮魂の思想が不可欠であった、と考えている。

(以下次号)

注

(1) 五来重『葬と供養』、東方出版、一九九二年。

(2) 岡村道雄『縄文の生活誌』(日本の歴史、講談社、二〇〇〇年。

(3) 同右、一七六ページ以下。